Akita University

巻頭言

巻頭言の執筆を要請されたのは、会長就任をお引き受けしたときについでこれが 2 回目です。そのとき、私は次のように書きました。

『新たに東北地区に赴任された数学教育を担当する先生方が、（東北地区に根を下ろして、かつ、東北地区の子どもたちに根ざした教育を構想していると私は考えているのですが、）本学会に目を向けていただけないということが残念で仕方がありません。』

これについては、山形大学に市川啓先生という心強い助っ人が現れ、本学会事務局の仕事を引き受けてくださり、若い世代の方の時代へと移行していくために第 1 歩を踏み出せたかなと思っております。

その次の部分ではこう書きました。

『数学教育研究の動向や指針を、主として外に求めていた時代は 20 世紀末で終わりになったのではないでしょうか。21 世紀は海外の数学教育も参考にしつつも、日本の子どもや文化環境等に根ざした数学教育を構築する世紀となるのではないでしょうか。』

これについては、不勉強でなんとも判断できないでいます。しかし、最近掲載された 2012 年の PISA についての新聞記事をみると、相変わらず、日本は 1 つの尺度の下での競争に参加しているようです。そうした見方の中にとどまっていては一人ひとりの子どもの姿は消えて見えなくなってしまうのではないでしょうか。

翻って、我々の東北数学教育学会は、世界の中では小さな地域である東北の地を原点に、射程は世界にまで広がった実践や研究を展開していくという alternative を選択して相互の研究協力と交流を進めかつ深めていく存在になりたいと考えています。2011 年の大震災と原発災害などなかったかのような、今日の日本の数学教育の研究動向の中で、きちんとそれにこだわりながら、現場主義の教育研究を推し進めて、東北の子どもたちの未来に貢献できていけたらと願っています。

栗原秀幸（福島大学人間発達文化学類）